



転移先は薬師が  
少ない世界でした3

---

饗餐  
Tsuetsu

RB

レジーナ文庫



ミユキ

グレイ

ユーリア

『フライハイト』のメンバー。  
とても仲良しなカップル。

タクミ

『アーミーズ』のメンバー。  
医者と薬師の夫婦。

ソラ

ユキ

ロック

狼の魔物である  
グレイハウンドの親子。  
狩りが得意。

ロキ

シマ

レン

猫の魔物であるビッグキャットの  
家族。寒いのは苦手。

リン(鈴原優衣)

神様のうっかりミスで  
異世界に転移した元OL。  
チートな薬師として  
大忙しな毎日を送っている。

スマレ

ダンジョンでリンと出会い、  
従魔となったデスタラテクト。  
実は過激派。

エアハルト

『フライハイト』のリーダー。  
リンのことをいつも気にかけている。

ヨシキ

ドラゴン族の冒険者。  
『アーミーズ』のリーダーで、  
しっかり者。

ラズ

リンの従魔である  
ハウススライム。  
手先がとても器用。

## 登場人物紹介

## 目次

転移先は薬師が少ない世界でした 3

7

書き下ろし番外編

見つけた存在 (ヨシキ視点)

325

転移先は薬師が少ない世界でした3

## 第一章 出合いと特別ダンジョン

リンこと私——鈴原優衣<sup>すずはら ゆい</sup>は、会社が倒産したことをきっかけに、ハローワークに通っていた。

そしてその帰り道、アントス様という神様のうっかりミスで、異世界——ゼーバルシユに落ちてしまった。

どうやら日本には戻れないらしい……というところで、私はアントス様からお詫びに授かったチートな調薬スキルを活かし、薬師としてポーション屋を営むことに。お店を開くまでには、いろいろなダンジョンに潜ったり、エンペラーハウススライムのラズと従魔<sup>ま</sup>契約をしたりした。

開店してからは口コミのおかげで毎日大忙しだけど、旅の途中で出会った侯爵家子息で騎士のエアハルトさん、彼に忠誠を誓っている執事のアレクさんや、家の管理を任されている双子の姉妹のラズさんとルルさん、ラズがお手伝いしてくれている。

それからしばらくして、ラズ以外の従魔<sup>じゆうま</sup>もたくさん増えた。

騎士団からの依頼で潜った上級ダンジョンで出合い、酷い傷を治したことで従魔<sup>じゆうま</sup>となってくれた、デスタラテクトという凶悪な蜘蛛——スマイレ。

ある日、ガリガリに痩せ、あちこちに大怪我をした状態で庭に現れた、スマイレの元仲魔<sup>なつか</sup>だという魔物たち——グレイハウンドのロキ、ロック。ビッグキャットのレンとシマ、ソラとユキ。

すっごく賢くて優しく、とても強い従魔<sup>じゆうま</sup>たち。

みんなも店の手伝いをしてくれるから助かっている。

他にも風邪が流行り始めたころ、第二王子でSランク冒険者であるグレイさんの紹介で、王宮医師のマルクさんに出会い、一緒に幼児用の風邪薬を開発したり。

エアハルトさんや『猛き狼<sup>おこみ</sup>』とカズマさん、『蒼き槍<sup>あお</sup>』といった冒険者のみなさん、後ろ盾になってくれたガウティーン家とユルゲンス家が、私の誕生日パーティーを開いてくれたりもした。

それがとつても嬉しくて、すっごく感動したの！

その後、騎士を辞めて冒険者となったエアハルトさん、アレクさん、グレイさんとその婚約者であるユーリアさんを仲間に加え、『フライハイト』という名前のパーティー

を結成した。

新たに私の居場所ができた瞬間だ。

そんなふうにはバタバタと過ごしているうちに、季節は秋になってしまった。ゼーバルシユに来てからもう半年なんて、あつという間だったなあ……

十一月初め、遠くに見える山々が雪化粧を始めたころ。

今日は店が休みの日だし、追加で薪にする倒木や枝を拾いに森へ行くことに。

ダンジョンに行くことも考えたんだけど、今のところ薬草も食材も足りているから、慌てて潜る必要がない。

〈リン。また、乾燥した枝や木を集めればいいのか？〉

慣れた様子で尋ねるロキ。

「うん。冬用の薪にするからね。もし【マジックボックス】に入らないようなら持ってきて。私の鞆の中に入れるから」

〈わかった〉

従魔たちと一緒にいつも来る西の森。

ビッグホーンディアやブラウンボア、ブラウンベアやビッグホーンラビットと戦いな

がら、従魔たちとまたダンジョンに行きたいと話をしていると、遠くで大きな物音や魔物の声があった。

「……なんだろう？ 誰か、戦ってるのかな」

〈我が様子を見に行こう。スマレ、ロックよ、一緒に来てくれ。リンはラスやレンたちと一緒に、ここで待っておれ〉

ロキが代表で様子を見に行ってくれるというので、素直に従う。

こういう偵察みたいなのは、いつもロキカレンかシマがやってくれるのだ。

そして敵を拘束するためには、ラスかスマレと一緒に行くことが多い。

偵察先で間違えて攻撃されないかなあ……っていつも心配になるけど、首に従魔用のリボンをしているからなのか、今のところ冒険者から襲われるということはない。

新しく従魔になってくれたみんなの姿が、たくさんの冒険者たちに浸透してきた証拠だろう。

その場で待っているだけで寒いから、近くにある倒木や枝を拾っては小さくしたり、ふかふかになっている腐葉土混じりの土を大きな麻袋に入れたりしながら、待つことしばし。

ロックだけが戻ってきて、怪我をしている人がいると報告してきたので、一緒にその

場へ行くことに。

怪我をしていた人は男性で、頭には立派な角があり、腰とお尻の間からは尻尾しっぽが生えていた。

角は、耳の上から頭に沿うようにして、上に向かって伸びている。

尻尾には鱗うろこがびっしりとついでいて、とても綺麗だ。

「大丈夫ですか？ 今、ポーションを出しますので、飲んでください」

「すまない。ありがとう」

かなり酷い怪我をしていたので、ハイパーポーションがいいだろうと予備で持っていたものを渡し、飲んでもらう。

MPもなくなっていると困るので、ハイパーMPポーションも飲んでもらったら、男性はとても驚いた顔をして、怪我をしていた場所を確認していた。

「凄いな……いっぺんに治ってしまった。それに、MPも満タンまで回復したよ。強力なポーションをありがとう。俺はドラゴン族のAランク冒険者で、ヨシキという」

感動した面持ちで自己紹介するヨシキさん。

おお、ドラゴン族の人に初めて会った！

「私は魔神族のハーフで、薬師のリンといいます」

「リンか。本当に助かった」

一息ついたのか、ヨシキさんが立ち上がった。おおう、かなりデカいんだけど！

たぶんだけど、エアハルトさんやアレクさんよりも、頭ふたつ分以上は大きいんじゃないかな。

私と比べたら、これこそ、大人と子どもの身長差だよ！

そしてヨシキさんは、もはや今では懐かしいと感じる迷彩服に似たデザインの服を着ていた。

この世界にも迷彩模様つてあるんだなあ。それとも、渡り人——私のようになんらかの事情があつて異世界からやってきた人々が伝えたのかな？

腕を組んでなにかを思い出すような仕草をしていたヨシキさんに、これから王都に戻ると伝えると、「案内してほしい」と言ってきたので頷く。

歩きながら話を聞いたところ、ヨシキさんはドラゴン族の国であるドラール国から来たんだって。

もうじき王都に着く……といったタイミングで、休憩しようと森に入ったら、ビッグベア三体に襲われたらしい。

同時に二体までなら倒した経験はあるけど、三体というのは初めてで、そのうえ疲れ

ていたこともあって判断が鈍り、後れを取ってしまったそうだ。

なんとか二体を片づけ、残りの一体と必死になって戦ったものの疲れで動きは鈍る一方。

死ぬかもしれないと焦っているところにロキたちが現れて、最後のビッグベアを倒したそうだ。

ビッグベアよりも強いグレイハウンドが現れたので、今度こそ死を覚悟したら、首に巻かれている従魔用のリボンが目に入り、安堵したんだとか。

その後ロキが私を呼びに行っている間、ロキがヨシキさんの側に残り、周囲の警戒までしてくれていたんだと経緯を説明してくれた。

再びありがとうとお礼を言われたので、その分帰ったら従魔たちをたくさん褒めて、撫で回すことにしよう。

「そうだったんですね。この子たちは私の従魔なんです」

「薬師なのにこんなに従魔がいるのか？」

「はい。ラズ——エンペラーハウススライム以外の子たちは、全員が酷い怪我をしています。たんです。それを治したら、従魔になりたいと言ってくれて……。ラズがいたとはいえ、私は一人だったので助かっていますし、大事な家族です」

「そうか……」

優しい目をして私の頭を撫でる、ヨシキさん。

その後、どうしてアイデクセ国に来たのか聞いてみた。

ヨシキさんが育ったドラル国は、この国よりもさらに西の海沿いにあるそうだ。

海沿いの国だけあって、輸出入が盛んらしいんだけど、最近輸入されるようになって、アツプルマンゴーやイチゴ、さくらんぼを見て、現物を採ってみたくなっただって。だから旅をして、この国まで来たそうだ。

王様、ドラゴンの国とも交易していたんだね。

今は知らない人を驚かせないよう人型になっているけど、本来はもっとドラゴンぽいらしい。

話しているうちに、王都の西門に辿り着いた。

宿を紹介してくれと頼まれたんだけど、私はいい宿を知らないからとヨシキさんを一旦待たせて、エアハルトさんに連絡した。

エアハルトさんは元騎士で現冒険者だから、そういった情報をたくさん知っていると思っただ。

門のところで待っていると、すぐにエアハルトさんが来てくれた。

「お休みのところをすみません、エアハルトさん」  
「構わない。彼が連絡をくれた冒険者か？」

突然のお願いだったのに、嫌な顔ひとつしないエアハルトさん。

「はい。宿を紹介してほしいそうです」

エアハルトさんとヨシキさんはお互いに名乗り、挨拶を交わしている。

その後、ヨシキさんが希望の宿の説明をしていた。

それを聞いたエアハルトさんは、「なるほど」と頷いて歩き始める。

宿屋街に向かう途中で店の前を通ったので、ここが私の店だと紹介する。

「ダンジョンに潜るときは是非！」と宣伝をすると、ヨシキさんは笑って「そのときは頼む」と言ってくれた。

私は二人と店の前で別れ、エアハルトさんとヨシキさんは宿屋街のほうへ、私は家中へと入る。

「ロキ、スマレ、ロック。今日は偉かったね。そしてヨシキさんを一人にしないでいてくれてありがとう」

〈リンが怪我人を放っておくとは思えんしな〉

〈リン、タスケル、オモツタ〉

〈リンママなら、必ずポーシオンを持っているし〉

大活躍だった三匹にお礼を言うと、少し照れ臭そうに嬉しいことを言ってくれた。

「そうだね。だから、ありがとう」

お礼と感謝をこめ、三匹を撫で回す。

他の従魔たちが羨ましそうに見ていたから、一緒に出かけてくれてありがとうと同じことをした。

結局もふもふツルスベまみれになったのは、言うまでもありません！

翌日。開店早々にエアハルトさんの元同僚であるビルさんと、以前マルクさんの護衛をしていた騎士——ローマンさんが顔を出した。

「今日はどうぞされました？」

「実は、ポーシオンが溜まってきてしまっただけ……」

少し困った顔をしてビルさんが切り出したので、紅茶とクッキー、ゼリーを二人に出し、詳しい話を聞くことに。

二人によると、冬の間は冒険者だけでなく騎士も、ダンジョンに潜る人数や回数が減るらしい。

だから、必要なポーションの数もいつもに比べて少なくなるんだけど、冒険者の数が減ったことで余裕ができた他店舗から騎士団への納品数が増えた結果、在庫を抱えてしまっているそうだ。

そういった事情で、騎士たちで手分けして各地区にいる薬師たちに「納品数を抑えてほしい」と通達しているんだって。なるほど、納得した。

あともう一点、ハイ系ポーションを作れるようになった薬師たちがいるから、今度から彼らに納品を頼もうと思っていると伝えられた。

ただ、ハイパー系と万能薬に関しては今のところ私しか作れないようで、私にはそれらの納品を引き続きお願いしたいと言われた。

他の人も頑張って挑戦しているみたいんだけど、ハイパー系は魔力が足りなくて断念している人が多いんだって。

ビルさんによると、王都にいる薬師が一日に作る事ができる普通のポーションの本数は、約百本程度だそうだ。

私の場合は、平気でその三倍以上は作れるからね……

本当に私の魔力ってチートなんだなあって、改めて実感したよ。

万能薬も失敗続きでまったく成功しないんだとか。

あと一歩で完成しそうなのに、失敗の原因がなにかわからないって悩んでるらしいんだけど……

実は、万能薬はハイパー系よりも作るのが簡単と思われているけど、それなりに魔力が必要でとても繊細な薬だっけ教えてほうがいいんだろうか。

魔力が足りていたとしても、種類がひとつ違うだけでも失敗する。

それに万能薬は全部で十五種類の薬草やキノコを使うんだけど、どれも種類の判別や扱いが難しい。

特に魔力草は液体の抽出が至難<sup>わざ</sup>の業で、最初にすり潰す段階で失敗すると、その時点でダメになる確率が高いのだ。

まあ、私かわざわざ言わなくても薬師であれば知っている情報だと思っただけね。

ちなみにローマンさんが一緒に来たのは、エアハルトさんの代わりにこの地区の担当になったから、挨拶をするためだったんだって。

紅茶とクッキー、ゼリーを食べきった二人は、一ヶ月後の次回の納品のころにまた連絡するからと言って帰っていった。

「まあ、ポーションの納品を控えるのは妥当だよな。さて、もうひと踏ん張りしますか」  
あと少しでお昼休みになるからと、従魔<sup>じゅうま</sup>たちと他愛もない話をしながら、時間が過ぎ

るのを待つ。

お昼休みには従魔たちと一緒に庭のお手入れをして、ご飯を食べた。

午後は『蒼き槍』のメンバーが来たので採取依頼をお願いしてみたんだけど……

快く引き受けてくれました！

その後、最近Aランクに上がった冒険者が、改めてよろしくと挨拶代わりにポーシヨンを買いに来てくれた。

「Bランク以下には売らないって言われて、最初は恨んだけど、リンちゃんからしたら仕方ないことなんだよな」

「まだ神酒は買えないけど、金を貯めていつか買いに来るから」

嬉しそうな顔をして話している冒険者たち。

「また来てくださるのを待っていますね」

いろいろあったけれど、それでも買いに来てくれたことが嬉しい。

それに、Aランクに上がるほどの技量と性根があるなら、そのうちSランクにもなれるんじゃないかと思った。

この一週間後、『猛き狼』とカズマさん、『蒼き槍』が、SSランクになった。

まさか、Sランクよりも上のランクがあるとは思わなかったよ……

〈彼らの技量は凄いもん〉

〈アンテイ、シテ、イタ〉

「そっか。ラズとスマレから見ても、凄いんだね」

私も、Sランクは無理でも、せめてAランクにはなりたくないと従魔たちと話しながら、みんなに囲まれて眠った。すっごく暖かったです。

どんどん寒くなってきた、十二月下旬。

日中でも暖炉や薪ストーブを焚かないと、震えるくらいに寒い。

どうやら、北の山の麓にある町で雪が降ったんだとか……どうりで寒いわけだ〜！

大陸の中央にある高い山脈の関係で、この国に雪が降るのは半月後。

雪が降るとダンジョンに行くのも難しくなるというので、それまでに『フライハイト』のメンバーで特別ダンジョンに潜ろうという話に。

今度の長期のお休みは来週だから、それまでに潜る準備をしておかないと。といっても、ほとんどいつもと変わらないんだけどね。

次の日の夕方、店じまいをしたあとにエアハルトさんが、特別ダンジョンに潜るための話し合いをするからと呼びに来た。ご飯も一緒に出してくれるそうだ。

おお、ハンスさんのご飯！ 今日は何にかな？ 楽しみ！

ハンスさんはエアハルトさんちの料理人で、私が教えたレシピをアレンジしているような料理を作ってくれるのだ。

「で、来週は特別ダンジョンに潜るわけだが、みんなはなにが欲しいんだ？」

エアハルトさんの質問に、それぞれが欲しいものをあげていく。

エアハルトさんはヒビロカネ、グレイさんはイビルバイパーの皮。

ユーリアさんはどんなものか気になるとのこと。豆腐を、アレクさんはイビルバイパーの皮に加えて、デスタラテクトの糸が欲しいと言っている。

みんなも、いろいろと欲しいものがあるんだなあ。

もちろん私は豆腐と油揚げ、厚揚げと、イビルバイパーの内臓狙いです。あと、醤油と味噌も。

そんな中、アレクさんの言葉にスマレが反応して、自分の糸をあげると言い出した。

珍しい。

「よろしいのですか？ 報酬は？」

〈ニワニ、イル、ムシデ、イイ〉

「おお、それは助かります。ですが、それだと僕がもらいすぎですね。他にもアップルマンゴーをご用意いたしましょう。では……糸はこれくらいの大きさを五個でどうでしょう？」

手で直径十五センチくらいの丸を作りながら言うアレクさん。

〈イイヨ〉

スマレは、サイズも報酬もそれなら大丈夫だと頷いていた。

アップルマンゴーはスマレの好物だからね。

まさに「超いい笑顔！」になっている。

他にも、イビルバイパーの鱗うろこを防具のうしろに貼るとか、武器を強化するのにゴoremが落とす金属が必要とか、みんなは私にはさっぱりわからない話をしている。

「あの、金属って、鉱山で掘るんじゃないんですか？」

魔物の勉強をしたときにも思ったけど、ゴoremが金属を落とすってなにさ。

「もちろん鉱山でも掘るが、ダンジョンに出るゴorem系の魔物は、なぜか金属と魔石をドロップするんだ。今回狙うのは青い色か、赤と金が混じったような色のゴoremだ。さあ、リン、問題だ。今俺が言った色のゴoremは、なにを落とす？」

親切に教えてくれたかと思いきや、突然問題を出してくるエアハルトさん。「えっと……たしか、青いゴーレムがメテオライトを落として、赤と金が混じったゴーレムがヒヒイロカネを落とすんでしたっけ？」

「正解」

おー、合ってた！ やったね！

ゴーレムは、その体色によって落とす金属の種類が変わる。

他には銀がミスリル、虹色がオリハルコンだったかな？

ちなみに、ゴーレムの弱点は打撃と【風魔法】。

なので、【風魔法】が使えない人はハンマーを持つていくんだとか。

もちろん私は【風魔法】で攻撃です。

他にも特別ダンジョンではオーガとレッドウルフ、レインボーロック鳥とビッグシープという魔物が出るそうだ。

オーガとレッドウルフは皮や毛皮が防具やコートの素材になるし、レインボーロック鳥やビッグシープは羽や毛が布団やクッションの中身、裁縫の素材になるだけでなく、お肉まで落とすんだとか。

言うなれば、特別ダンジョンは素材と食材の宝庫。

だからこそ特別ダンジョンと名付けられたという。

よし、素材は最小限にして、私は薬草と食材を採りまろう！

エアハルトさんたちや他の冒険者によると、特別ダンジョンにはいろんな種類の薬草があるというし、もしかしたら今まで見たことがない薬草や果物があるかもしれない。

特別ダンジョンに潜るための準備はみんながしてくれているという。その分、ポーションに関しては任せてもらった。もちろんハイパー系と万能薬、念のため神酒ソーマを持っていくよ。あとはダンジョンに潜る前に一度、凄腕せうぶの鍛冶職人かじであるゴールドさんの店に寄らないとなあ。

自分でできる簡単な手入れはしていたし、ちょっと前にもメンテナンスしてもらっていたけど、採取用のナイフの切れ味がおかしいのだ。

大鎌のレベルも教えてもらいたいしね！

翌日、お昼休みにゴールドさんのところに行った。

ナイフを見せたらもう寿命だと言われてしまったので、買い替えることになった。ついでにラズの分も一緒に買い替え、大鎌のレベルも教えてもらう。

レベルなどの詳しいことは鍛冶師用の【鑑定】だからわかることであって、【アナラ

イズ」だとそういう情報は出ないんだよね。

ゴールドさんによると、あと一回、森にいるベアかボア、ディアを倒せば希少レアになるそうなので、今度のお休みのときに狩りをしてこようと思う。

ちなみに、私の大鎌みたいに成長する武器は、ゴールドさんのような鍛冶師かじにレベルを聞いて、成長させていくのが普通だそうだ。

ナイフ二本分のお金とメンテナンス代を払い、ゴールドさんの店を出る。

そして次の休みの日に『フライハイト』のメンバーで森に行き、倒木を【風魔法】で薪まきにしたり、枯れ枝を拾いつつ戦闘訓練をして、大鎌のレベルを上げた。

【ヴァーバル・サイズ】希少レア

高名な薬師が草刈りに使っていたという大鎌

希少レアではあるが、成長するといわれている

成長すると伝説までになる少し変わった仕様

薬師が装備した場合に限り、ボーナスあり

薬師が装備した場合：攻撃力+400 防御力+400

進化したところ……こんな感じになりました！

成長したからなのか、特典ボーナスが増えているよ……。嬉しいからいいか。

そして、またしばらく戦闘をしていたら、このあたりでは見かけたことがない、真っ黒いベア種の魔物が出た。

「なっ、ブラックベアのネームドだと!? 構えろ!」

エアハルトさんが焦った様子で指示を出す。

「おう!」

「ええ!」

「え? あ、はい!」

私がネームドってなんだっけ? と思い出している間に、ブラックベアが雄たけびを上げてうしろ足で立つ。立った姿は、三メートル近い高さがある。これはデカイ!

「グルアアアアツ!」

〈ガオーン!〉

ブラックベアと、ロキとロックの【咆哮】がぶつかり合う。勝ったのはロキたちだった。ブラックベアの動きが止まったその隙を見逃さず、すかさずラズとスミレが拘束。



【咆哮】の硬直から逃れたブラックベアはもがいて逃げ出そうとするが、もちろん、私たちが取り逃がすはずもなく……

ロックが放った【土魔法】で穴を掘り、そこに落として再びブラックベアの動きを封じた。

すぐにレンとシマ、ソラとユキ、そして私たちの魔法がそこに着弾する。

ドーン!!

爆発と共に突上したので、【風魔法】を使って煙を掃う。  
すると、ブラックベアの片腕が取れているのが見えた。

それ以上の手負いになる前にと大鎌を振るうと、首が綺麗に落ちた。

「……ふう。従魔たちがいたおかげで、なんとかなったな」

「そうだね」

「ですが、どうしてネームドが……」

無事に倒すことができてやっと話す余裕が出てきたんだけど……

「あの、ネームドってなんでしたっけ?」

「個々の名前が与えられるほど強い魔物の総称だ。このブラックベアの場合は、オルソという名前だな」

私はずっと抱いていた疑問にエアハルトさんが答えてくれる。そういえば、外には名前がつけられた凶暴な魔物が存在すると聞いた気がする。そのことなんだとやっと理解できた。

ただ、森の深い場所とはいえず、どうしてこんなところにネームドがいたのかわからない。なにかあったのかもしれないからと解体せず、念のために冒険者ギルドに持つていくことになった。

「せっかくの肝臓と心臓が……」

「はっつ！ リンはぶれないね。解体しても問題ないってわかったら、ちゃんと交渉して、もらってくるから」

せっかくのブラックベアなのにと悲しんでいると、グレイさんが声をかけてくれた。

「わ〜！ ありがとうございます、グレイさん！」

できればお肉も食べてみたいと言うユーリアさんに全員で領き、冒険者ギルドへ向かう。

その日の夜。お目当ての肝臓と心臓をもらい、みんなで熊肉のステーキとスープを食べているときに聞いたんだけど、どうやらあのブラックベアは隣国から来たらしく、冒険者ギルドが注意喚起の通達を出すところだったそうだ。

その前に私たちが遭遇して倒してしまったから、ギルマスに「よくやった！」と褒められ、討伐の報奨金をたくさんもらった。

解体した中でいらぬ素材を売ったお金に加えて、それも山分けしてくれたので、お財布がパンパンになった、とだけ言っておく。

そんなトラブルがあった数日後。

今日から五日間、特別ダンジョンに潜る予定だ。

特別ダンジョンは広さとしては初級ダンジョンと中級ダンジョンの間くらいだけど、出てくる魔物が上級の上層か中層に出るようなものばかりなので、ゆっくりめのペースで移動するんだそうだ。

セーフティーエリアは各階層にふたつずつあって、第二階層に限り、行きは下りる階段に近いほう、帰りは上る階段に近いほうに泊まるんだって。

特別ダンジョンまでは、スレイブニルを使った馬車で一時間くらいらしい。

結構遠いんだなあ。今までが一番遠いかもしれない。

御者はアレクさん。エアハルトさんの馬であるスヴァルトルの頭の上にスマイレが、グレイさんの馬であるセランデルの頭の上にはラスがのって警戒している。

レンたち一家とロキたち一家は、並走したり馬車のうしろを走ったりしていた。とても強い従魔<sup>じゆうま</sup>たちがいるおかげか、森や草原に生息している魔物は私たちの馬車に一切寄ってこない。

スライムやホーンラビットに至っては、馬車を見ただけで、逃げ出していた。時間があるので、エアハルトさんにもう一度、特別ダンジョンではどんな魔物が出るのか教えてもらい、しっかりと頭に叩き込む。

常に戦っている人のほうが経験が豊富だし、より良い戦い方や弱点を知っているからだ。確認の意味でも、しっかりと聞いておく。

そんなことをしている間にダンジョンに着いた。

預かり所でスレイプニルたちと馬車を預かってもらい、ダンジョン手前にある建物でレベルなどのチェックを済ませます。

そして肝心の特別ダンジョンだけど、入口はどこも一緒なのかな？

この特別ダンジョンの入口も、石でできたアーチ型だった。

まずは第一階層。

ここは草原がほとんどを占めていて、一部に岩山がある。ビーンという絹さやのような形をしている手足がついた植物の魔物とレインボーロック鳥、ビッグシープとビッグ

スライムが出るんだそうだ。スライムって本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>にどこにでもいるんだね。スライムゼリーが安いのも納得だ。

そしてビーンは、ユーリアさんが欲しいと言っていた豆腐をドロップするらしい。

「あれ？ ビーンっていう魔物は、醤油や味噌を落とすんじゃないんですか？」

前にそんなことを聞いた気がする。

不思議に思ったのでエアハルトさんに尋ねてみる。

「シヨウユやミノも落とすが、どうも体色によって落とす物が違うらしくてな。未だにはつきりとわかっていないらしい」

「なるほど。ちなみに、醤油と味噌は何色ですか？」

「シヨウユが赤、ミノが茶色だよ。あと、未確定だがトーフは白、アブラアゲが黄色、

アツアゲが黄色と白のまだらだという情報がある」

「そうなんですな！」

「あとはレアなものとして緑がいるんだが……逃げ足が速くてまだ誰も討伐に成功していないから、なを落とすのかわかっていない」

ほく、緑もいるのか。緑って、まさか枝豆かグリーンピースじゃないよね？

どっちでもいいから、出会えないかな。なんか、豆ご飯が食べたくなってきた！

「じゃあ、採取するか。リン、頼む」

「はい。みんなもお手伝いをお願いね」

〈〈〈〈〈わかった！〉〉〉〉〉

今のところ周囲には敵がいないので、まずは採取。スキルを発動させて、周囲を見渡す。

「おお？　なんか、いろいろな薬草がありますね」

「本当か!？」

中級ダンジョンにもあつた薬草が見つかったので、それをメンバーのみんなに教える。

「ラズ、一緒をお願い。ロキたちもお手伝いしてほしいけど、警戒もしてね」

〈うん〉

〈〈〈〈〈わかった〉〉〉〉〉

私も一緒に採取しながら、特別ダンジョンにしかない薬草やキノコを探したんだけど、こんなところで松茸っぽいキノコを発見したよ！

名前はマツツタケ。そんなにたくさんは生えてなかつたんだけど、移動しながら探したからなのか、最終的に結構な数が採れた。

みんなに食い気味にお願いされたので、晩ご飯にはマツツタケを使ったものを作ることに。

マツツタケを採取していると、突然ロキが声をあげた。

〈リン、ビーンがいる。緑だ〉

「え、ほんと!?　倒せる?」

〈やる〉

〈マカ、セテ〉

ロキの警告を聞いてラズとスマレがささっと動き、触手と糸で緑ビーンを捕まえる。捕まったことに気づいた緑ビーンだけど、ラズの触手とスマレの蜘蛛糸からは逃げられない。

その状態でエアハルトさんが剣で斬ると、アイテムをドロップして姿を消した。

落ちたのは魔石と、緑色のさやがたくさんついた植物。

「なんだ、これは？　初めて見るが……」

エアハルトさんは不思議そうな顔をしているけど……

「もしかして……枝豆!？」

見たことがあるその姿に、慌てて【アナライズ】を発動する。

## 【枝豆】

さやに入っている、食用の豆  
 塩茹ですることでも食べられるようになる  
 エールやワイン、ビールのお供に相応しい一品

おおう、まんま枝豆でした！　そしてさらっと書かれているけれどビールがあることに驚いた！

「エダマメってなんだ？　それにビール？　どんなものだ？」

エアハルトさんが興味津々な様子で質問してくる。

「枝豆は説明の通り、食材です。塩茹でしてそのまま食べてもいいし、豆ご飯にしてもいいし、スープに入れてもいいし。ビールは発泡したお酒ですね」

「ビールってやつは酒なのか……」

「この場にあったとしても、ダンジョンでは飲めないね」

「残念でございますね」

「本当に……」

私以外のみんなが残念がっている。

「ビールか……。たしか、ドラール国で造っていると聞いたような……」

グレイさんがなにか思い出したのか、口を開いた。

「ほんとか!?　グレイ！」

お酒好きなエアハルトさんが嬉しそうな声をあげた。

「ああ。違っていると困るから、帰ったら父上か宰相に聞いて確認してみるよ」

グレイさん曰く、ビールはここ百年くらいの間にできた新しいお酒らしい。

ここ百年ってことは……まさかと思うんだけど、転生者がレシピを伝えたりしてないよね？

……まさか、ね。  
 もしかしたら渡り人の可能性もあるけど、ここ百年なら転生者のほうが可能性が高い気がする。

最後に召喚があったのが二千年前だから、レシピを伝えたのが渡り人だとするとともに前から広まってもおかしくないもんね。

もし本当に転生者がいるのなら、その人に会って話してみたいなあ。

〈リン？〉

「あ、ごめんね。大丈夫だよ」

ラスから心配そうに声をかけられて、意識を戻す。

今はダンジョンだから、きちんと集中しないと。考えるのは家に帰ってからでもできることだから。

なにより、メンバーや従魔<sup>じゆうま</sup>たちに心配をかけたくないし、もし私がぼんやりしていたせいでみんなが怪我してしまったら、薬師として自分のことが許せない。

一旦それは置いて。

緑ビーン一体につき五株もの枝豆を落としたので、すっかりパーティー用の麻袋に入れる。

「よし。次に見かけたら、すぐに倒していいからな」

〈うん！〉

〈ヤル〉

〈〈〈〈〈任せろ！〉〉〉〉〉

エアハルトさんの指示を受けて従魔<sup>じゆうま</sup>たちは殺る<sup>や</sup>気いっぱいだ。

今度は赤と茶色のビーンが三体ずつ出てきたので、みんなで戦闘する。

落としたのは事前情報通り、醤油と味噌、そして魔石だ。

「ミソとシヨウユの依頼数はあといくつだ？」

「二十ずつですわ」

「先が思いやられますが、ここは結構赤と茶が出ますから、すぐに依頼達成となるのではないでしょうか」

「そうだね」

ドロップ品を拾いながら、そんな話をするみんな。

この戦闘を皮切りに赤と茶、それに交じって白と黄色、まだらのビーンが出る。次々に倒してはドロップと魔石を拾う。そして何回か戦闘するうちに、白は豆腐、黄色は揚げ、まだらは厚揚げをドロップすることが確定した。

こういう情報を持ち帰ることも、冒険者の仕事のひとつなんだって。

そして、薬草やキノコに交じって、さつまいもと山芋が見つかった。見つけたのはソラとユキだ。

「お〜、さつまいもは焼き芋にしよう。山芋はお好み焼きかな」

〈焼き芋つてにやんだにや？〉

ソラが目をキラキラ輝かせて聞いてくる。

「そのままだよ。この赤い芋を焼いて食べるの」

〈美味しにや？〉

「甘くて美味しいよ！ あとで作ってあげるね」

〈へやつたにゃー!〉

甘い物が好きな二匹はとても喜んでる。

山芋に関してはダンジョン内で作るつもりはないけど、お好み焼きやスープに入れてもいいし、短冊切りにして揚げて美味いと思う。

うーん……海苔があればなあ。そうすれば、磯辺揚げができるのに……残念。採れるだけ採って、リュックに入れる。

そんなこんなで採取したり戦闘をしたりしてセーフティーエリアを目指して歩いていると、体高二メートルもある大きな羊の魔物、ビッグシープと戦闘をしている冒険者がいた。

戦闘が終わり、ドロップを拾う五人の冒険者。

顔を上げたうちの二人は、私もよく見知った顔だった。

「あれは……フォレクマーさんとミケランダさん?」

「あ」

私の眩しが聞こえたのだろう……顔をこちらに向けて驚いた顔をしたのは、本当に冒険者ギルドのマスターのフォレクマーさんと、サブマスターのミケランダさんだった。

さすが、獣人族、耳がいいね!

「お久しぶりです。どうしてここにいらっしやるんですか?」

「簡単に言うと、ギルマスとサブマスをクビになって、冒険者に戻ったんだ」

苦笑いをしながら言うフォレクマーさん。

「はい?」

エアハルトさんたちメンバーは知っていたみたいだけど、私は初耳だったので驚く。

まあ、私は基本的に冒険者ギルドに行かないんだから、知らないのは当然か。

フォレクマーさん曰く、二人していろいろとミスした結果、私の店の件が決定打になってギルドを統括とうかくしている国からお叱りを受けたそうだ。

そのときにギルドマスターを辞めて他の仕事をするか、冒険者に戻るか選択を迫られたという。

なので冒険者に戻ることを選択し、以前仲間だったメンバーとパーティーを再結成して、ダンジョンの攻略をしているらしい。

「そうなんですね」

「ずいぶんあっさりしているが、それだけなのか?」

「たしかに当時は怒っていましたが、それはやらかした冒険者に対し、きちんと対処しなかった冒険者ギルドにであって、フォレクマーさんやミケランダさん個人にはな

いんです」

「え……」

「え、つて……。まさか、お二人に対して怒っていると思ってたんですか？」

そう聞くと、気まずそうな顔をしながらも二人は頷いた。

だから、店にもポーシオンを買いに行けなかったらしい。

「まあ、まったく怒っていないというのは嘘になりますけど、今さら怒るようなことはしませんよ。それでも気にするのなら、今度、お店にポーシオンを買いに来てください。

あと、ビッグシープの狩り方を教えてください。それで相殺にしますから」

「そんなことでいいの？」

「いいですよ。別に、安く売るわけじゃありませんし」

「そうか……。すまなかった、リン」

「すみません、リン」

フォレクマーさんとミケランダさんが改めて謝罪してくれたのでそれを受け入れ、ビッグシープの攻略方法を教わった。

なんとというか、フォレクマーさんたちは根っからの冒険者なんだと感じたよ。

だから冒険者としての腕や個人での指導はとても優れているけど、全体を纏める指導

力というのかな……。それが足りなかったんじゃないかって思う。

だって、戦闘をしているときの二人はとも生き生きしていたし、攻略方法もとても丁寧にわかりやすく教えてくれたもの。

蟠りがまったくないわけじゃないけど、もう終わったこと。謝罪を受けたのにも

までも引き摺っているのは違うと思うし、私の性分じゃない。

「じゃあ、戻ったら買いに行かせてもらおうよ」

「それまでに稼ぐわね」

「はい！ 楽しみに待っていますね」

フォレクマーさんたちと握手を交わし、別れた。

そして、待っていてくれたみんなのところに戻る。

なんか、呆れているような……。なんで？

「リン、もつと怒ってもよかったですんだぞ？ それだけのことをされたんだから」

腕を組みながら言うエアハルトさん。

「もう終わったことじゃないですか。いつまでも引き摺っているのは違いますよ」

「リンはいい子ですわね」

ユーリアさんは私を見て微笑んでいる。

「お店に来てほしいという打算も欲望もあります。なので、全然いい子じゃないです」そんな話をしてから採取と討伐に戻る。

この階層でまだ狩っていないのが、ビッグシープとビッグスライムだけだ。早く出会わないかな……なんて考えていたら、ビッグスライム、レインボーロック鳥、いろんな色のビーンが出てきた。

それらの魔物を難なく倒し、再びセーフティーエリアを目指していると、ビッグシープに出くわした。その数、三体。

「ビッグシープだな。みんな、頼むぞ」

「了解」

「任せてー」

ビッグシープは体高があるから倒すのは容易ではないけど、攻略法がきちんとある。

脚を攻撃し、頭が下がったところで首を攻撃するか、【土魔法】で穴を掘って落とし、目や首を攻撃するのだ。

ビッグシープの体は分厚い体毛に覆われていて剣や槍が弾かれてしまうので、目や首など弱い部分を重点的に攻撃するとフォレクマーさんたちが教えてくれた。

なので、私たちも同じ方法で戦闘開始。

ロキが【咆哮】で足止めし、ロックが【土魔法】で足元に穴を掘り、穴に落ちたところを見計って首を攻撃する。それでも動くようなら、ラスとスマレが拘束。

私は一番左のビッグシープを大鎌で斬りつけた。

一回では首を斬り落とせなかったので、私のあとに続いてレンとシマが攻撃。

それでも倒れないので今度はソラとユキが攻撃し、そこで光の粒子となった。

みんなのほうを見ると、穴に落ちたビッグシープの首を攻撃し、戦闘が終了していた。今回のドロップはみんな同じで、魔石と、大量の羊毛と毛糸だ。

お、毛糸もあるのか、この世界は。絨毯があるんだから、毛糸があるのも納得だよね。

「……よし。もうじきセーフティーエリアだ。ドロップを拾ったら移動する。気を引き締める」

エアハルトさんの言葉に、みんなで頷く。

羊毛は商人と冒険者両方のギルドから依頼が出ているので、別々の麻袋に入れる。

そして、再びビッグシープが現れ、それを難なく倒したその直後……

ちょうど経験値が溜まったようで、ラス以外の従魔たちがその場で次々に進化した。

私は素直に嬉しくて、「これなら間違って従魔たちを攻撃されなくて済む」と、胸を

撫で下ろしたのだけども……ロキの進化先には私を含めたみんなが驚いた。まず、スマレはデスタイラントに進化して、体が一回り小さくなった。体色は変わらないけど、目が赤くなった。

ロックはヘルハウンドという種族になり、体色や体格はそのままだけど、幼さが消えて精悍な顔つきになった。

レンとシマ、ソラとユキは、サーバルキャットになった。体色は全員そのまま、体格はより細くしなやかに、一回り大きくなった。

そしてロキは天狼という、珍しい種族になった。体色はチャコールグレーから明るめのグレーになり、一回り大きくなり脚も太く大きくなった。

天狼は魔物図鑑にのっていない種族。

過去に目撃されたのは十数年前で、昔の文献に記載されているだけだそうだ。

それほど珍しい種族らしい。

それぞれがSランクの魔物なんだけど……

立派になったねえ、みんな！主人として誇らしいし、とても嬉しい！

ラズはみんなを見て羨ましそうにしながら、へエンペラーだから、これ以上は進化しないよ」と言っていた。

「今のままでいいんだよ」という気持ちをこめてラズを撫で、セーフティーエリアに入る。

さて、今日のお昼の担当はアレクさん。なにが出るのかな？

「リン、コメの炊き方をもう一度教えてくださいますか？ どうにも焦げてしまつて、うまくいかないのです」

申し訳なげな表情を言うアレクさん。

「いいですよ。焦げるつてことは、火加減が強すぎるんだと思うんです」

今までもアレクさんを含めたみんなにご飯の炊き方を教えているんだけど、やっぱり火加減で引つかかるみたい。アレクさんの言葉を小耳に挟んだ全員が集まってきて、私のお話を聞いています。

もう一度つきつきりで火加減を教えると、今度は焦がさずにご飯が炊けたと喜んでいました。

スープはダンジョンで採れたホーレン草と持つてきた卵で、あっさり塩味。

おかずはさつきドロップした、レインボーロック鳥の串焼き。

「おお、レインボーロック鳥のお肉って、柔らかいのには弾力があって、味も濃くて、とても美味しいです！」

「でしよう？ 滅多にドロップしませんから、貴重ですよ」

そう言ってアレクさんも串焼きを頬張っていた。  
なんと、レアドロップでしたか！

だから商会や中央にあったお肉屋さんでも見かけたことがないのかと納得した。  
ドロップしても、大抵はその場で食べてしまうことが多いから、出回ることはあまりないんだって。出回ってもワイバーンのお肉かそれ以上に高いし、その美味しさからすぐに売り切れてしまうんだとか。凄いなあ。

休憩が終わったのでセーフティーエリアから出て、すぐ近くにある第二階層に下りる階段を目指した。今日はその近くで一泊します！

晩ご飯は松茸ご飯ならぬ、マツタケご飯とお吸い物。

おかずはシンプルにマツタケを網で焼いたもの、ブリに似た魚の照り焼き。そしてホーレン草の白和えと少しだけ甘い玉子焼き、キャベツときゅうりを塩もみしただけの浅漬け。

ソラガリクエストしてくれた焼き芋は、デザートの代わりだ。

マツタケご飯はおかわり推奨なので、おかずはこれ以上出さないことにした。

「……」

「……」

食べ始めたら、全員無言で食べるように食べている。もちろん「超いい笑顔」だ。

これなら大丈夫かと私も食べ始めた。

……うん、日本にいたときは減多に食べられなかったけど、美味しい。味も香りも抜群です！

みんなしてご飯とお吸い物をおかわりし、たくさん食べた。とつても美味しゅうございました。

焼き芋もほくほくしつとりで、とても甘かった。ソラも気に入ったみたいで、嬉しそうに尻尾を揺らしている。

今日の野営の見張りは、私が最後の順番。

従魔たちがいるとはいえ私一人で大丈夫かな……と不安になったのだけど、結局は何事もなく野営を終え、片づけをして出発です。

昨日同様に第一階層の採取と戦闘をこなしつつ、第二階層へ下りる階段へ向かう。

醤油と味噌は早々に依頼分の採取を達成しているし、羊毛もあと少しで依頼完遂となったところで階段を見つけた。

階段を下りると、そこは鬱蒼と茂った森になっていた。

「イビルバイパーはこの階層からだ。地上だけじゃなく、木々の上からも突然襲ってくるから、警戒だけは怠るな」

「了解」

〈エアハルト、右からなにか来るにや〉

〈左からも来るにや〉

レンとシマがさっそく警告してくる。

「ちつ、挟み撃ちかよ！ リンは従魔たちから離れるなよ！」

それを聞いたエアハルトさんが指示を出してくれるので、従う。

エアハルトさんとアレクさん、ロックとレンが右を、グレイさんとユーリアさん、ロキとシマが左を向いて迎撃態勢を整える。

ソラとユキ、二匹の頭の上にラズとスミレがのって私を護衛し、私はどちらにも魔法とハイパー系や万能薬をかけられるよう、二組の真ん中に陣取る。

すぐに木々がざわざわと揺れ、十メートルはあるうかという大きなヘビ——イビルバイパーが左右両方から一体ずつ現れ、私たちを襲ってきた。

それを見て、ロキとロックがそれぞれに【咆哮】を放つ。

そして私はウインドウォールで壁を作り、イビルバイパーが撒き散らす麻痺毒を防ぐ

盾にした。

イビルバイパーは毒と一緒に敵を麻痺状態にする液体を吐き出すから、厄介なのだ。

スミレが蜘蛛糸で二体のイビルバイパーを拘束し、麻痺毒の心配がなくなったところで、みんなで一斉に攻撃開始。

私はウインドカッターを順番に打ち込み、怪我をしたみんなにヒールウインドやハイポーション、またはハイパーポーションをかける。

ソラとユキも、私を護衛しつつフレアランスで援護している。

それにしても、進化してから、みんなの動きが前以上に凄くなっている。

イビルバイパーはあつという間にその姿を光の粒子に変え、魔石と皮、内臓と鱗、肉をドロップした。

「ふう……。リンの従魔たちがいると、本当に戦闘が楽だ。ありがとう」

〈リンを護るためでもあるからな。気にするな〉

〈そうにや。それに、同じバイパーメンバーにや〉

エアハルトさん、ロキ、レンの会話を聞きながら、ラズと一緒にドロップを拾う。

内臓は貴重なポーションの材料だから私がもらうけど、他のドロップ品はみんなのものなのでバイパー用の麻袋に入れる。